

アクアペラーゴ論とオセアニア研究

諏訪淳一郎
(弘前大学)

1. はじめに

本稿では、国際学術雑誌 *Shima* (ISSN: 1834-6057) がオセアニアを対象として扱ってきたテーマである「アクアペラーゴ論 *aquapelago*」について紹介するとともに、これからのオセアニア研究に与える可能性について簡単に展望する。日本からもすでにオセアニア研究者による論文が掲載されているから、そうした意味でもこの手短な紹介が学会員の関心を促す役割をわずかでも果たすことを願っている。

なお、*Shima* は横断的かつ複合領域的な議論の場であるが、筆者の専門領域の関係上、本稿の論旨が文化人類学に傾斜しやすい点はご了解願いたい。

2. *Shima* と国際小島嶼文化会議 (SICRI)

Shima は、豪州に拠点を置くフィリップ・ヘイワードを編集責任者として 2007 年に創刊した。以来、本誌は多くの賛同者を獲得しながら、人文社会科学系を中心に多数の投稿論文でにぎわっており、2022 年現在で 16 巻を数えている。その魅力の一つは本誌が自由で学際的かつ独創的なパラダイムによる島嶼研究を目指すという、発刊から一貫した編集方針にあるのは間違いない。

ヘイワードは、人魚伝説を対象に研究を進めていく中で、かねてから海洋あるいは水圏と人間の生活世界との関係性について強い興味を抱いてきた (Hayward 2017, 2018b)。そして、出身の英国を離れて豪州に移住し研究生生活を送るなかで、関心の軸をオセアニアの島嶼に広げていった。西洋では「フィジーの人魚 *Fiji/Feejee Mermaid*」などと呼ばれる怪しげな剥製が出回り、好事家たちの怪奇趣味を満たす「驚異の小部屋 *Wunderkammer*」などに私蔵されていたことがよく知られているが、ヘイワードの興味はフィジーの人魚の背景である植民地主義そのものよりは、どちらかという後半人半魚というビジュアルが喚起する想像力についてである。しかし、ヘイワードは人魚伝説に対象を限定することなく、パプアニューギニア (Hayward 1998)、トレス海峡 (Hayward and Konishi 2001)、ウィットサンデー諸島 (Hayward 2001)、ロードハウ島 (Hayward 2002)、ノーフォーク島およびピトケアン諸島 (Hayward 2006) などの音楽文化に焦点を当てた調査を精力的に行い、モノグラフや論文を発表していった。内容については割愛するが、それらの業績では豪州が置かれている大洋州という地理的特性、1999 年に客員研究員として招聘された関西大学での経験 (個人的なコミュニケー

ジョン 2022 年 12 月 2 日) など、アジア太平洋地域へのまなざしが色濃く反映されている。

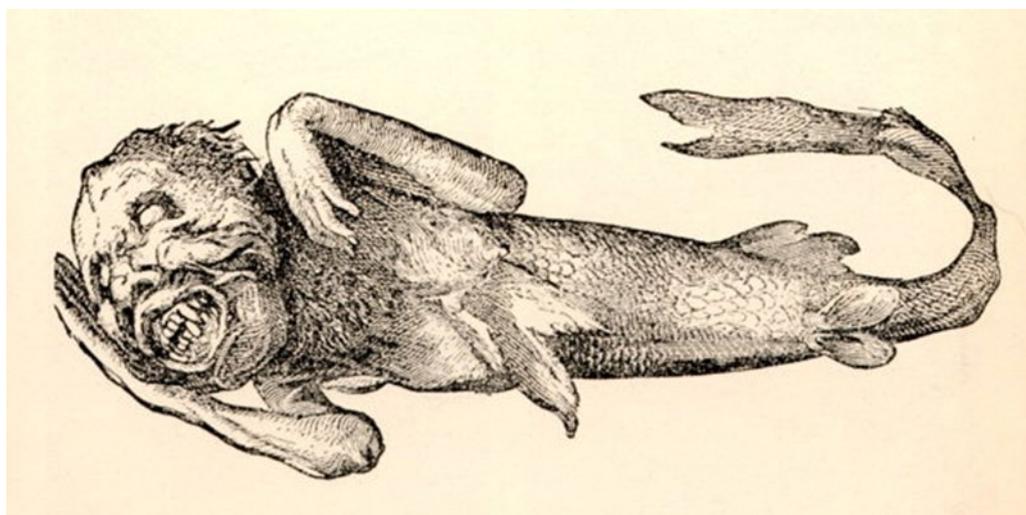


図 1 フィジーの人魚 (<https://www.subculture.at/fiji-mermaid/>)

このようにして、ヘイワードには次第に島嶼そのものを対象として扱う構想が次第に芽生えてきたといえるが、彼の新しい島嶼研究は必ずしも地理学や地政学などの既存の分野に限定されず、多種多様なディスクールによる「島嶼的なもの」について深く掘り下げることが主眼であった。そして、2005 年に鹿児島大学多島圏研究センター（当時）で、国際小島嶼文化会議 International Small Island Cultural Research Initiative 第 1 回目の研究大会が開催され、豪州をはじめとする各国からの参加者が研究発表を行った。以来、SICRI は世界各地で今日まで定期的に研究大会を開催しているが、学会組織という形を取らないため、*Shima* も SICRI の会誌とは位置づけられてはいない。とはいえ、いずれもヘイワードが企画し、その活動の初期においては組織運営も行っていったことから、両者はしばしば緊密に連携しあってきた。ただ、地理的空間としての島嶼を重視するかどうかとの観点でいえば、SICRI と比べて *Shima* がよりラディカルな立場で活動してきたといえそうである。

第 1 回目の SICRI が成功裏に終わったことを奇貨として、翌 2006 年には *Shima* の創刊に先立ち、「21 世紀初頭における島嶼文化の変容に関する会議」（原題 Conference for island cultures in transition in the early 21st Century）が香港大学で開催された。筆者は、パプアニューギニア・マダンでの長期調査の 1 年近くを離島で暮らしていた縁で、今回も発表者として参加することにした（諏訪 2005）。だが、この発表では、パプアニューギニアのフィールドデータを用いながらも、考察部分に「そもそも論」を付け加え

ることによって、以前から漠然として抱いていた違和感の表明に目的を定めることにした (Suwa 2006)。

そもそも、研究対象を「(小) 島嶼」に限ってしまうことは、大陸と島嶼の定義上の区別 (前者は豪州より面積の大きい陸地、後者はグリーンランドより面積の小さい陸地) に見られるように、西洋中心的な島嶼観を残すことにつながる。しかも、定義づけられた島嶼を論述の基礎部分に充ててしまうと、結果として研究全体が本質論に陥るだろう。加えて、島嶼に関する事例を収集した報告のみで巻を重ねていけば、遠くからして議論が自己目的化し、内容も深まらず、雑誌の品質にも影響が出る恐れがある。要するに、根本的なパラダイム転換なしに、既存の島嶼学以上の学術的貢献は困難なのである。それならば、島嶼について語りながら、いささかも本質論的でないような「島嶼」論はどこに求められるのだろうか。

そこで、筆者はこの新たな研究の座標のために、西洋中心的な島嶼の概念をいったん解体するべく一つのデモンストレーションを行うことにし、日本語・琉球語における島嶼を意味する単語である「シマ」からみた英語 *island* の再定義を試みた。その目的は、もちろん日本的島嶼概念を本質化するイーミックな民俗語彙を示すことではなく、あくまでも新たな島嶼概念のモデルの提示にあった。だから、このアイデアは、初めから世界各地の島々を対象にするべき概念として着想した。

「水上の土地」を意味する古英語から転じた現代英語の *island* は、地形から派生した概念である (ラテン語 *insula* は語源不詳)。これに対して、日本語・琉球語のシマは、特徴的な地形としての島嶼を指す概念以上の意味を持つ。事務室に配置された机の固まりから町内の暴力団の縄張りに至るまで、あるいは南西諸島における集落から民俗芸能における用語 (酒井 2005:24) に至るまで、シマはつねに何らかの文化実践と想像力が交錯するような、ある特殊な場に存在している。そしてその形状は必ずしも海岸線によって区切られるもののみではなく、抽象度を持った認識上の境界線による空間としても生成する。さらに、「ここは俺らのシマだ!」と宣言するように、あるいは奄美におけるシマの領域が近隣から集落、村落、島嶼、日本へと同心円状の広がりを見せるように、どのシマも何らかの主体性を構成ないし想像する空間として生成している。例えば海面上昇によるシマの消失などは、身体感覚的に持続可能性への脅威として認識されうる。これと同様に、生活世界を形成するようなシマへの意識が、それによって想像され構築された領域をサンクチュアリにしているといえる。こうして新たに定義される島嶼においては、何らかの陸地の広がり、それを取り囲む水の広がり、そこに生起するあらゆる生の様式が不可分な一つのものとして主題化されるし、それは地理的な概念としての島嶼でないシマと間断なく共鳴し合いながら把握されていくことになる。そして、これは最終的には想像力に関するテーマの開拓へとつながっていくはずなのである。

香港での発表は、帰国後にパプアニューギニアのフィールドデータを取り除き、理

論的考察の部分を加筆し、*Shima* の創刊号のために投稿した (Suwa 2007)。すると、原稿を受け取ったヘイワードはこの論文を巻頭に置いただけでなく、雑誌そのものを *Shima* と名付けてしまった。その理由は、香港での発表によるシマに関する問題提起が、英語圏のイディオムでは極めて斬新なものとして話題を呼んだからであったという (個人的なコミュニケーション、2018年12月6日、2021年2月16日)。ともかく、こうした経緯から *Shima* は島嶼を舞台とした学際的な思考実験の場所として、当初からその役割を明確にしていた。

付け加えると、この論文をきっかけに筆者はネイティブ人類学者として *Shima* 以外の場でも水域に関する企画に関与するようになっていき、特に海外の研究者によってこの暗に求められた役割を果たすことを諒としてきた (Suwa 2021)。それも、日本を軸として着想したアイデアを加工しつつ世界のより一般的な事例へと敷衍するという作業に知的可能性を感じたからであった。

3. アクアペラーゴ論とは何か

2012年刊行の第6巻第1号において、本誌は一つの転換点を迎えることになる。それが、ヘイワードが提唱し、それ以降もいくつかの論文として展開されることになる「アクアペラーゴ *aquapelago*」の概念による一連の考察である (Hayward 2012)。ここではそれらを「アクアペラーゴ論」とまとめて呼ぶことにする。ヘイワードの論文の冒頭では、国際島嶼学会傘下の学術誌 (*ISJ*) に掲載された論文 'Envisioning Archipelago' (Stratford, Baldacchino et al 2011) への批判的コメントがつづられている。*ISJ* 論文の著者は、島嶼と孤立した地理的概念としてではなく、つねに複数の島嶼からなるつながりの中に「群島」(アーキペラゴ)として捉えなおすことを提案した。これに対して、ヘイワードは次のようにその問題点を述べる。「この論考では、陸海の空間を統合して(拡張されるべき)群島的なアイデンティティを含むことのできるすべての検討を忌避している」(Hayward 2012:2)。換言すると、島嶼あるいは群島について、つねにそれを包み込む水域と一体のものとして把握しない「群島」概念は、探求が不徹底だというのである。そこで、ヘイワードは島と島の線的な連絡として表象されるアーキペラゴから「主要な」を意味する接頭辞の *archi-*を取り、代わりに「水」を意味する接頭辞 *aqua-*をくっつけて、これを *aquapelago* と新たに名付けたのである。

アクアペラーゴのイメージの下敷きは、ハウオファによる *sea of islands* (島の海) という島嶼観である (Hau'ofa 1994)。ヘイワードの造語アクアペラーゴ *aquapelago* は、*aqua* (水) + *-pelago* (島々) に分解される。アクアペラーゴ論の源流は、日本語の「多島海」を射程に入れつつも、ハウオファによる *sea of islands* に求めることができる。ハウオファは、少なくともオセアニアにおける島嶼においては、それぞれが孤立した存在ではなく、本来的に一つとなった海上のテリトリーであることを喚起し、群島に

ついで島々を線的に結び付けたようでない空間として認識するべきと主張した。線によって結びつく島々は、所詮孤立した点の集合に過ぎない。これに対して、ハウオフアは、群島というものが一つの海という認識の上では無限と等しいような面として、なおかつ水と不可分な生存の領域として存在するとして、従来の島嶼観の捉えなおしを強く訴えた。

もっといえば、ロビンソン・クルーソーの孤島や、ゴーガンのアジュールとしての離島植民地、あるいはオアフ島を主なロケ地とした2004年から2010年まで世界中で放映された米国のテレビドラマ *Lost* などは、西洋中心的・植民地主義的な観念の世界に属するものであり、かりに非西洋の想像力によっても離島のイメージが産出するとしても、ハウオフアの立場からすればそれらは適切な島嶼観とは言えない。島嶼はいわゆる「文明世界」の監獄のようなものとして決して本質化できないような現実性を有しているのである。このように、ヘイワードの論考は、島嶼についてグローバルシステムの後背地あるいは隔絶した「離れ小島」の鎖として位置づけようとする思考が転倒であることを示した。

さらに、ヘイワードのアクアペラーゴ論では、「アクアペラーゴ・アッサンブラージュ *aquapelagic assemblage*」と「アクアペラーゴ想像力 *aquapelagic imaginary*」という下位概念を設けて補強を試みている (Hayward 2012, 2018b)。ここで、*assemblage* の和訳を英語風の「アセンブリッジ」ではなく仏語風に「アッサンブラージュ」にしたのは、そこに『千のプラトー』の影が見えるからである (Deleuze and Guattari 1987)。アッサンブラージュは、全体と部分からなる樹状の関係性ではなく、相互に不可分でパラダイム化できない根茎状の関係性について表現している。したがって、アクアペラーゴ的アッサンブラージュにおいても、陸地と海洋と人間や生物の相互関係を視野に入れながら、個別にパラダイム化されず分離不可能な根茎 (リゾーム) としての概念化がなされている。アクアペラーゴ的想像力とは、アッサンブラージュを具現化し表象化することによって存在させる想像力なのである。ヘイワードはこれらの点において島嶼を地理学的な対象から解き放つことを構想したのである。また、これはシマ概念が水と陸地を分け隔てることなく扱おうとした視点とも呼応する。

本誌では、特集としてヘイワードによるアクアペラーゴ論の提唱に続いていくつかの事例研究が掲載された。寄稿にあたって「日本の事例で」とお題を振られた筆者も、林子平『海国兵談』で有名な「江戸の日本橋から唐、阿蘭陀まで境なしの水路なり」というフレーズを引用するなどして、絞り出すように原稿をまとめた (Suwa 2012)。この、ヘイワードからの畑違いともいえる依頼に応じる気になったのは、同じ問題意識を *Shima* 刊行の前夜から持ち続けていたことと、そのころ執筆していた音楽人類学の理論書でもアッサンブラージュをキー概念として構想していたからでもあった (諏訪 2012)。

もう一方の「アクアペラーゴ想像力」は、2018年に編まれた人魚に関する特集で使

われた。その直接のきっかけは前述したようなヘイワードの関心もかかわっていろいろが、その当時はさらに深刻な問題意識が *Shima* に持ち上がっていた。それは、6年前にアクアペラーゴ論文が予言し、さらにその4年後にヘイワードが執筆した巻頭言において改めて示した通り (Heyward 2016)、島嶼概念の拡張と解体が極限まで進んでいけば、もはやアクアペラーゴは地理的な実体ですらない何者かとして対象化していくということである。たとえば、人魚や半魚人などは陸上と水中の動物を繋ぎ合わせたアッサンブラージュだから、突き詰めていけばそれ自体がアクアペラーゴのとしての性格を有しているというべきなのである (Hayward 2018b, Suwa 2018)。そもそも、シマ概念は必ずしも島嶼としての地理的な具象を有していなくても「島嶼」が存立することを示していたのであって、それは唐突な議論というわけでもなかった。そして、こうした地理的具象からのテイクオフは、現象論ないしは認識論の領野において生成するものであったから、アクアペラーゴ想像力はシマを生成する現実界に直接的に働きかける作用を帯びているといえることができる。

アクアペラーゴ論においては、人魚について語ることと島嶼について語ることを、同じ言説空間の中で展開しなければならない。人魚が人でありながら人でないのと同じように、島嶼も島でありながら島でない何かとして議論されることになる。結果、激しい議論の末にヘイワードが反対を押し切る形で特集を取りまとめた。これには、*Shima* がこの期に及んでついに島嶼学としてのアイデンティティを捨てたと感じる研究者もいたようである。他方、ノマドを志向する筆者はこの新たな展開もそれまでと同じく歓迎し、コロナ禍による文献調査だったが、琵琶湖水系の人魚のミイラについて寄稿した (Suwa 2018)。この論文が目指したのは、琵琶湖周辺に現在も確認される人魚のミイラの物質性と、ミイラが伝説化した末に供養の対象となることのアクアペラーゴにおける相互作用についてであった。そこでは琵琶湖について竹生島にも言及したものの、人魚を一つの現象として中心的に扱っているという意味ではもはや島嶼についての論文ではなくなっている。つまり、アクアペラーゴ想像力はアクアペラーゴ論の最前線なのである。

現在もなお *Shima* では島嶼に関する論文が主に掲載されてはいるが、人魚特集号以降は地理的実体としての島嶼を対象とするこだわりがほぼなくなったようである。ヘイワード自身も、それまでは基本的にオセアニアや招聘で滞在した日本をはじめ世界各地の島々で調査した事例を発表してきたのが、所属大学でのヴェネツィアの人文地理に関する国際共同研究の成果報告の場として *Shima* で特集を組むなど、より柔軟にテーマを選ぶようになった。そして今やアクアペラーゴ論のフロンティアは地球上のあらゆる海洋と内水どころか、洪水、氷雪、水蒸気といった気象現象にまでに及ぶ (Hayward 2020, Suwa 2022)。ここに至って、アクアペラーゴ・アッサンブラージュは、気候と地圏と水圏が表象と文化実践を取り込んだ普遍的かつ特別な場所性を意味することとなったのである。

4. アクアペラーゴとしてのオセアニア

これまで雑誌の沿革についてかいつまんで見てきたように、オセアニアという地域はアクアペラーゴ論だけでなく、*Shima* という雑誌そのものの揺籃であった。ある意味、本誌によるシマ概念の提唱からアクアペラーゴ論に至る道のりは、ヨーロッパでもアジアでもアメリカでもない大洋州という地域固有の想像力によって構想され発信されたユニークな学問の最初の例といえるだろう。興味深いことに、*Shima* ではオセアニアや太平洋地域に関する論文は決して多数派ではなく、バランスよく文字通り世界の七つの海をまたぐ地域をフィールドにした論考で占められている。

さて、誌上に掲載されたオセアニアを事例研究とする論文はもちろん数多いし、関連領域も多岐にわたるし、その視点もさまざまである。なので、ここではアクアペラーゴ論の観点からとくに興味深いものに限定していくつか紹介しておく。

バエスはフィリピン・ミンドロ島の先住民であるマンヤン族が 9.11 以降の国際情勢によってテロリストとして迫害され、マニラ市近郊の「サンクチュアリ」で国内難民化し、トラウマからの癒しと文化振興の目的で民族音楽 CD を制作した経緯について、プロジェクトの当事者の立場から論じている (Baes 2007, 2013)。著者が直接シマ概念に言及しているわけではないが、難民のマンヤン族はすでにミンドロ島には住んでいないわけだから、シマが島嶼的な何かを存立の条件としながらも必ずしも地理的な空間としてのみ存在するとはいえないことが、このフィリピンからの事例でもわかる。つまり、シマ概念は日本・琉球語圏以外の空間にまで拡張することができるということである。バエスの視点は、少なくとも従来の島嶼学的な標準からすれば扱いの難しいものであったことは論を待たないであろう。

ヴァンダートップによるスヴァ市の洪水に絡んだ現地のナラティブについての考察では、熱帯病の猖獗を極める湿地帯を造成して完成されたフィジーの近代都市という植民地主義的言説が、マングローブの衰退による土壌浸食によって引き起こされる洪水という現実によって解体され、現在ではマングローブ再生の試みへと変容していった過程が明かされている (Vandertop 2022)。汽水を好んで広がり、泥に根を下ろして浸食を食い止め、生物相の多様性を守るマングローブは、アクアペラーゴ・アッサンブラージュの指標であると同時にアクアペラーゴ想像力によって再生されていく対象でもあるのだ。その過程において、フィジーの人の自己認識もポストコロニアルを経てまた新たなものに変容していくことが、この論文にはよく描かれている。

ジョルダナはニューカレドニアのベレブ諸島におけるカナク人社会が、いかにして植民地時代に現地に植え付けられた中心と周縁パラダイムを脱していく過程について論じている (Giordana 2020)。1998 年のヌーメア協定発効以降、ニューカレドニアではフランスからより多くの自治を獲得すると同時にカナク人の権利により配慮した政策

が後押しされることとなり、それに伴ってベレブ諸島では伝統文化保全にかかわる政策が小規模村落レベルで実施されることとなった。これらの政策では地域の自然環境との共生を念頭にした持続可能な社会変革にかかわる取り組みがなされている。ベレブ諸島民は、本論文が概念化する「文化の創造性 cultural creativity」にしたがって、自分たち自身による島嶼社会への想像力によって、植民地時代に起こった社会の難局を打開しつつある。

ディックはバヌアツのエスピリトゥサント島ルーガンヴィル市郊外に立地するバンクス諸島出身者のディアスポラ共同体が立ち上げた、芸術集団の活動を通じてバヌアツ島民による「地誌 chorography」の生成について論じている (Dick 2015)。ここでディックが注目するのは、あくまでも砂絵や伝統芸能といった文化実践に関わる活動であって、それによって描出される「地誌」は、記述言語や地図情報によるものではないし、暗黙知のメンタルマップとも異なっている。これらの芸術活動は、公演などを通じて関係者に移動を促すことにより、その軌跡が記憶されることによって、ある特殊な「地誌」を生成する。この新たな意味での地誌は、人々の生活領域にさまざまな影響を与えるような、文化実践としての場所性である。そうしたシマを意識させるような場所性が、アクアペラーゴ想像力として人々の中に島嶼を認識させているのだ。ちなみに、「地誌」と和訳される chorography は、語源的には「場所」を意味するギリシア語「コロス khoros」に由来する。ちなみに、同じ語源による「コーラ khora」についてはデリダによる興味深い議論がある (デリダ 2004)。

アイカウとビクーニャゴンサレスは、ハワイにおける観光が再生産してきた当初のイメージを解体する目的で、先住民を中心に現地の生活に根差した語りをアート、詩、エッセイなどを用いながら昇華させ、それぞれの土地あるいは場所に同化させるプロジェクトの立ち上げに関して論じている (Aikau and Vicuña Gonzalez 2019)。彼らの背景にはポストコロニアル・フェミニスト文学があり、マイノリティがいかにして自分自身のシマを領域化するのかというアクアペラーゴ想像力に関する問いが描出されている。

以上、ざっと目を通してきたが、オセアニアからみたアクアペラーゴ論には以下のような特徴を簡単ながら指摘しておきたい。

第一に、島嶼と海洋という地理的条件ならびに陸水の存在は、単純に生態の基本条件としての自然として扱われてはいないことである。それらは洪水などのカタストロフィーをもたらすし、人工物に対するある種の抵抗を行うマングローブのように、人間の営為と接合する何者かとして取り上げられている。そこにはある種のアニミズムの影すら見出すことができる。たとえば、マングローブや砂絵は、人間の手によって生成されるというよりも、それらが現出することによって、はじめてシマが姿を現すような様相を見ることができる。

第二に、ディック論文が「地誌 chorography」と試みに呼んだように、あるいはジョ

ルダナによる「文化の創造性」が示唆するように、アクアペラーゴ論においては表象行為あるいは文化実践と呼ぶべき営為について、それらはつねに場所性を生み出すものとして扱われる。そこでは、砂絵、伝統芸能、コロニアリズムの語りによるエクリチュール、伝統的手法によって植えられたヤムイモといった表象の対象物は、それらが生起する場所を同時に生み出している。そしてそのように紡ぎだされた場所性は、そこに生きる人々の生を接合するのである。

第三に、シマは純粹で自然発生的なコミュニティというよりは、島嶼が植民地など支配的言説による語りによって接合されながら表象化されることに起因する疎外の構築を解体する作用を持った認識の上に発生している。現地の文化実践の中に伝統、非伝統を問わずシマに戻る感覚が生み出され、様式化される過程が存在する。その時のシマが文化的同質性のもとに想像され実践されるのでないとすれば、そこに生起する相互作用とはどのような性格を持ったものなのか、今後も問い続けていかねばならない課題でもあるだろう。

また、アクアペラーゴ論からのアプローチは、エネルギー安全保障、国際政治、開発プログラム、医療などについていえばまだまだこれからといったところであって、今後興味深い論文が発表されることが期待される。同様に、水産資源管理、人口移動、経済成長など、アクアペラーゴを実体として捉えることを可能にするような量的調査の枠組みなど、さらなる課題もある。

5. アクアペラーゴ論と日本におけるオセアニア研究

アクアペラーゴ論が日本におけるオセアニア研究に与える示唆についてここで述べてみたい。なぜならば、豪州とハワイという大洋州における2大研究拠点とは対照的に、日本が英語圏でも仏語圏でもない、独自としか言いようのない知的風土を有しているからである。その日本からオセアニアを見ていくまなざしにアクアペラーゴ論を付け加えると、どのようなことになるのだろうか。今後ともこの辺りの議論は深めていかねばならない課題の一つであろう。

まず、アクアペラーゴ論は、オセアニアないしは大洋州について、一つの地域またはブロックのようなまとまりとしてみなすことの行き詰まりを示唆する。オセアニアは地域ではなく、ハウオフアが言った通り *sea of islands* であるし、冒頭に述べた林子平の日本橋からオランダまでが一本の水路でつながっているという言明は、その含意をとれば単にシーレーン防衛の観点からではなく、それがアッサンブラージュとしての潜在性を持っていることを示唆してはいないだろうか。となれば、たとえばパプアニューギニアをオセアニア、日本を東アジアと分類して考えるマードック流の発想にどのような利益があるというのだろうか。これらの島嶼をアクアペラーゴとみなすならば、すべての島々はアクアペラーゴ・アッサンブラージュである。日本がオセアニア

の一員になるとか、豪州やパプアニューギニアもアジアに数え得るとか言っているのではない。「どの地域の所属か」が問題にされるとき、個別の島々と地域との関係性は樹状のパラダイムに還元されうるため、それはすでにアッサンブラージュではないからである。ポストコロニアリズムの言説は、そうしたパラダイムの超克にこそある。

アクアペラーゴ論の観点からすれば、それは地域ではなくシマなのだ。もちろん、一視同仁、四海平等という意味ではなく、包括的なまとまりとしてシマが存在するでもない。ただ、そこに生の領域としての水と陸が広がっており、それと不可分にあらゆる社会的なものと文化的なものとの根を下ろしたり浮遊したりしているのだ。そして、日本が日本と呼ばれる以前のシマであり、そのほかの島々もシマとなる場所性を目指していけば、たとえばポストコロニアリズムに関してならば、日本において考察するときにはありがちな、自身の身の回りから乖離した統合失調的でフェティッシュ的な世界観からの脱却を果たせるかもしれない。知識として頭からポスト植民地を知るのではなく、肌の感覚として、シマのリアリティと想像力の中に再び捉えなおすような視点が可能なのではないか。そのようなあいまいな表現が許されるのであれば、だが。

アクアペラーゴ論から見れば、日本らしさも、アジアらしさも、オセアニアらしさも存在しない。あるのはそれぞれのシマとそれを産出したシマに条件づけられたりするような、アクアペラーゴを現実化する「想像力 imaginary」と仮称されたある作用のみである。そこではオセアニアとの物理的距離は主要な問題ではない。アクアペラーゴは移動する場所性によっている。そうした場所は、距離ではなくむしろ位相と呼ぶべき空間に生起するからである。離島を例にとれば、それを定義する距離的な指標は実は存在しない。離島の存在という感覚を支えているのは、中心と周縁の関係性、そして両者を囲んでいる水というアクアペラーゴの条件である。その意味において言えば、中心と周縁ではなく周縁と周縁の関係性として島々を把握しようとした桑原らの論考は、アクアペラーゴ・アッサンブラージュの考え方を予告しているかのようでもある (Kuwahara et al 2007)。これもまた、日本におけるアクアペラーゴ論の可能性といえるだろう。

6. むすび

アクアペラーゴ論によるオセアニア研究は、もはや異文化との対話でもなく、文化の鏡を見ることでもない。どのような対象をテーマに選んでも、アクアペラーゴ論は日本にいる我々の存在自体に影響する。加えて、日本におけるオセアニア研究は、ネイティブ・スカラシップであって、それは古典的な文化相対主義を創造的に破壊する。人魚が人でも魚でもないように、アクアペラーゴはアッサンブラージュとして存立する。また、アクアペラーゴ想像力に関する考察を突き詰めていけば、アクアペラ

ーゴはもはや地理的実体としての島嶼を意味する必要がない。そして、アクアペラーゴ想像力がそのアッサンブラージュを可能にするということは、アッサンブラージュがもたらす人の営為は、たとえば人新世における気候変動概念の実践ともかかわることになるだろう。アクアペラーゴ論においては、あらゆる水による生のアッサンブラージュとして、例えばオセアニアのシマという空間が新たに生成し続けるのである。

<謝辞>

本稿の執筆にあたって、フィリップ・ヘイワード先生からは事実関係の確認も含め助言と励ましをいただいた。また、筑波大学大学院では文化人類学と民俗学の両方を学ぶことができ、オセアニア研究だけでなく常に日本へのまなざしを持ち続けることができた。不肖の院生であった私の指導に当たってくださった牛島巖先生には改めて学恩を感じてやまない。

<参考文献>

Aikau, Hōkūlani K. and Vicuña Gonzalez, Vernadette

2019 Curating a Decolonial Guide: The *Detour* project. *Shima* 13(2):11-21.

Baes Jonas

2007 Mangyan Internal Refuges from Mindoro Island and the Spaces of Low-Intensity Conflicts in the Philippines. *Shima* 1(1):59-72.

2013 ‘Patangis-Buwaya’: Reflection and praxis ten years after engaging with Iraya Mangyan internal refugees *Shima* 7(1):121-126.

Deleuze, Giles and Guattari, Felix

1987 *A Thousand Plateaus*. Brian Massumi Tr. Minneapolis: University of Minnesota Press.

デリダ、ジャック

2004 『コーラ：プラトンの場』 守中高明訳 未来社

Dick, Thomas

2015 Chorographing the Archipelago: Engaging with performatively constituted specificities of place. *Shima* 9(2):1-22.

Giordana, Lara

2020 The Creative Constitution of an Archipelago: Intercultural dynamics in the Belep Islands of Kanaky New Caledonia. *Shima* 14(2):131-148.

Hau’ofa, Epeli

1994 Our Sea of Islands, *The Contemporary Pacific* 6(1): 148-61.

Hayward, Philip

1998 *Music at the Borders: Not Drowning, Waving and Their Engagement with Papua New Guinean Culture*. Bloomington: Indiana University Press

- 2001 *Tide Lines: Music, tourism & cultural transition in the Whitsunday Islands (and adjacent coast)*. NSW: Music Archive for the Pacific Press.
- 2002 *Hearing the Call: Music and Social History on Lord Howe Island*. Lord Howe Island Arts Council.
- 2006 *Bounty Chords: Music, Dance and Cultural Heritage on Norfolk and Pitcairn Islands*. New Barnet, UK: John Libbey Publishing.
- 2012 Aquapelago and Aquapelagic Assemblages: Towards an integrated study of island societies and marine environments. *Shima* 6(1):1-11.
- 2016 Toward an Expanded concept of Island Studies. *Shima* 10(1):1-7.
- 2017 *Making a Splash: Mermaids (and Mermen) in the 20th and 21st Century Audiovisual Media*. New Barnet, UK: John Libbey Publishing.
- 2018a *Scaled for Success: The Internationalisation of the Mermaid*. New Barnet, UK: John Libbey Publishing.
- 2018b Mermaids, Mercultures and the Aquapelagic Imaginary. *Shima* 12(2):1-11.
- 2020 Ningen: The generation of media-lore concerning a giant, sub-antarctic, aquatic humanoid and its relation to Japanese whaling activity. *Shima* 14(1):134-151
- Hayward, Philip and Konishi Junko
- 2001 Mokuyo-to no ongaku: music and the Japanese community in the Torres Strait (1890-1941) *Perfect Beat*, 5(3): 34-47.
- Kuwahara Sueo, Ozaki Takahiro, Nishimura Akira
- 2007 Transperipheral Networks. *Shima* 1(2):1-13.
- 酒井正子
- 2005 『奄美・沖縄哭きうたの民族誌』 小学館
- 諏訪淳一郎
- 2005 『ローカル歌謡の人類学』 弘前大学出版会
- 2012 『パフォーマンズの音楽人類学』 勁草書房
- Suwa, Jun'ichiro
- 2006 How Islands Became Cultural Landscape: Clay Pots, Tourism and Cultural Capital of Yabob Island. 口頭発表 *Conference for island cultures in transition in the early 21st Century*. 香港大学 11月1日
- 2007 The Space of Shima. *Shima* 1(1):6-14.
- 2012 Shima and Aquapelagic Assemblages: A Commentary from Japan *Shima* 6(1) 12-16.
- 2018 Ningyo Legends, Enshrined Islands and the Animation of an Aquapelagic Assemblage around Biwako. *Shima* 12(2):66-81.
- 2021 Shimaumi: Aquapelagic imagery and poetics of 'island-laying' in Kojiki. *Coolabah*, 31:67-79.

2022 Water, Land and Vapour: Assemblages and the imaginary. *Shima* 16(1):1-5.

Stratford, Elanie, Godfrey Baldacchino, Elizabeth McMahon, Carol Farbotko, and Andrew Harwood

2011 Envisioning the Archipelago, *Island Studies Journal* v6n2: 113-130.

Vandertop, Catlin

2022 A Swamp Becomes the Capital: Urban ecologies of empire in Suva (Fiji). *Shima* 16(1): 47-61.